

氏 名	やまぐち かずひろ 山 口 和 宏
学 位 の 種 類	博 士 (教 育 学)
学 位 記 番 号	論 教 博 第 105 号
学位授与の日付	平 成 15 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	土田杏村の近代

論文調査委員 (主査) 教授 辻 本 雅 史 助教授 鈴 木 晶 子 助教授 駒 込 武

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、1910年代後半～30年代前半の「在野の文明批評家」で、また自由大学運動の理論的指導者として教育史上著名な土田杏村の思想の全体像とその特色を解明したものである。

本論文は、序章と終章を含めて全8章で構成され、さらに資料が付されている。まず、入手可能な既存のほぼすべての研究を再検討して、杏村の思想の全体像が捉えられていないという先行研究上の問題点を指摘して、杏村の問題意識に即した杏村思想の全体構造把握という、本論文の課題が提示される(序章)。生い立ちと青年期の思想の解明(第1章)、病を転機に華厳経の世界観を自覚した思想的転回の検討(第2章)、京都帝大哲学科で新カント派哲学に出会うことで主張された「文化主義」の哲学とその思想の解明(第3章)、この「文化主義」の立場から実践された自由大学運動の理論(教育理論を含む)と実践の実態とその限界(第4章)を検討し、ついで社会改造をめざして展開された政治・経済の理論とその思想的問題点が解明される(第6章)。さらに杏村思想の到達点が、マルクス主義の影響を受けつつそれと対抗的に提示された「地位の哲学」にあると確認され(第6章)、最後に杏村思想の意義が、同時代の思想のなかでの意味を確認しながら、結論的に提示されている(終章)。

本論文が結論的に論じた杏村思想の全体構造は、「華厳象徴の世界観」を根底に置いて生活現実と哲学を相互に関連づけ、「一つの統一された原理」としての「文化主義」によって文明のあらゆる現象を批評し、「文明の運動」に「聡明」を与えることによって、最終的にすべての人が「価値生活」をおくることのできる「パーソナル、アナアキイ」という社会理想を実現しようとするものであると、要約できる。ここでいう「華厳象徴の世界観」とは、1915年、病において死と直面した杏村の、「宗教的法悦」体験によって得られたもので、それは「世界と人生のあらゆるものがそれぞれに孤立せず、その在りの儘を以て相互に影響し、結合し、その何れの部分を以ても全を表現する」という世界観のことである。この世界観が、杏村の「文化主義」思想と彼の「文明批評」、さらに社会改造ビジョンの源泉となっていた。

杏村の「文化主義」は、個人の生き方の原理でもあり社会改造の原理でもあったため、他の社会思想に対する対抗言説の形で主張された。その結果、マルクス主義者からは反動的ブルジョア小市民思想とみなされ、固陋な国家主義者からは危険思想家とみなされ、アカデミズムの哲学者からは通俗的啓蒙家と軽んじられることが確認されて、そこに1930年代以後杏村評価が下がった理由がたどられている。

杏村自身は「今、ここ」に実現すべき「時論的理念」の必要を説き、思想の社会实践を主張したが、「価値」を「何等の内容をも含まない普遍妥当性を有する」形式的なものと把握し、「究極の無義」とまで抽象化したために、彼の実践性が、「時論」に流され普遍妥当的理念との結びつきを失いかねないという思想的弱点を抱えていた。それは、日本の当時の思想一般の例に漏れず、杏村の中に「他者との対話」の契機が欠けていたためであると、その理由が指摘される。

とはいえ、最晩年に到達した杏村独自の「地位の哲学」は、人間がその「地位」や「非生命的なもの」にいかにか大きく規定されているかの認識を示している。それこそ「リアルな他者性認識」にもとづく教育思想構築に向けた人間学的基礎とな

りうるものと著者は評価する。杏村は、人間は「相互理解の不可能性」や「永遠の闘争」の側面をもつと把握していたが、同時に、そうした「情欲」による闘争的な「相克」の社会から、他者の他者性が互いの個性を生かしあう「相乗」の社会へ転換させていく道筋を示していたと強調される。杏村は、それに必要な「宗教的信念」を、「神を容認し得ない現代人」にも受け入れ可能な言葉によって与えようとしつづけたのであり、杏村の思想と実践はその点において独自の意味が付されている。こうして確認された杏村の思想には、他者の他者性の問題を考え抜いているだけに、すでに近代を越える、いわば「後近代」の教育思想を構築する手がかりを既に備えていると指摘され、さらに現代の我々に示唆している杏村思想を研究する現代的意義が強調される。また日本近代の思想がそなえていた奥行きの深さも、そこに読みとられている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、自由大学運動の理論的指導者として教育史上著名な「在野の文明批評家」土田杏村の、思想の全体像とその特色を、これまでにない確度で解明したものである。とくに以下の点で高く評価できる。

第1に、入手可能なほぼすべての先行研究を詳細に検討し、先行研究の問題点が、広範囲な文明批評家杏村のある一面だけを切り取って議論しているため、その思想的全体像が把握されていない点にある、と批判的に総括される。著者は全集未収録分も含め杏村のほぼ全著作を繰り返し精読し、テキストの正確な解釈を通して、杏村の問題意識に添って、杏村思想の全体構造の解明に取り組んだ。そしてそれを高い完成度で達成し、これまでの杏村研究の水準を飛躍的に高めた、と評価できる。

第2に、これまでの教育史研究上、杏村の自由大学運動は「国民の自己教育運動」の典型例として特に高く評価されてきたが、本論文は、そうした杏村像は、戦後の教育史叙述を支配してきた「国家対国民」という対立図式からなされた一面的解釈であると批判する。その上で、杏村の主張した「自己教育」の思想が大正デモクラシーの先端的部分に位置づく反面、「国家」と融合し、「全体主義」に結び付きかねない構造も色濃くもっていたことを、思想分析によって論証している。

第3に、自由大学の実践運動の思想的基礎に、杏村独自の「文化主義」の哲学があったことを解明し、さらにこの「文化主義」の哲学の詳細な分析によって、自由大学運動が内包していた可能性（文化的教養を身につけることで、社会的改造を進めていく可能性）とその限界（異質な「他者」不在の社会教育論）の両面を指摘し、自由大学運動が挫折していく必然性を、その思想的文脈において論証している。その結果、自由大学運動の意味と、それを理論的に支えた杏村評価に、確度の高い新たな知見を提出することに成功している。

第4に、先行研究が新カント派等のドイツ哲学の影響面を評価する反面、杏村の抱いた華嚴経の世界観は東洋的・非合理的であるとして無視もしくは軽視し、杏村思想の中に正当に位置づけてこなかった。これに対して本論文では、華嚴経世界観との出会いが思想の転回をうみ、それが以後の思想の根底をなしていたことを論証してみせ、杏村の新たな思想的特質をもって提示している。

第5に、杏村の思想を日本近代の哲学史的文脈に位置づけている。杏村は「在野の文明批評家」として、国民への啓蒙的著作を量産する文筆家としての生き方を選択した。そのため哲学界から評価されることはほとんどなかったが、本論文は、杏村の哲学を、形成史も含めた展開過程を丹念にたどり、その哲学の内在的な理解と分析に取り組んでいる。要するに、華嚴経の世界観を根底にすえて、京都学派の中で学んだ新カント派哲学を咀嚼して「文化主義」を唱え、社会実践を経るなかでマルクス主義の影響を受けつつそれに対峙し、晩年に「地位の哲学」にたどりつくまでの哲学的思索の過程とその詳細な分析をこころみ、アカデミズムの哲学界とも対峙した杏村の哲学的位置づけをおこなっている。さらに、「地位の哲学」がもつ新たな可能性を指摘して、現代に生きる我々の問題、なかでも「他者の他者性」との関係性を基礎にもつ教育の、現代的な課題やポストモダンへの示唆を読み取っている。

第6に、上記5の解明作業は、杏村の抱えた課題をその時代において考察し、その思想的達成と問題点を分析する作業であったが、本論文は、杏村研究によって日本近代が到達した思想的な奥行きの深さと可能性を確認することまで意図されている。というのは、杏村の課題が、日本近代が共通して抱懷していた本質的課題にはかならず、かつその多くは、今の我々自身の課題に重なっていることを明らかにし、杏村研究がもつ現代的意義に説得的に説き及んでいるのである。

本論文は、対象に即して対象を理解する杏村の「フェアシュテーエン」の方法を採り、本論文のテキスト解釈の読みの深

さと思想の内的構造の解明に成果を上げているが、それと裏腹の関係で本論文の方法的弱点になっている。つまり内在的理解の方法が、杏村を外部からの視点で見ることの弱さになっている点があるのは否めない。また史料批判において杏村の著述の発表メディアの性格規定に関する分析が時に不十分であるため、同時代の社会状況の中で杏村の位置づけが明確でないところも見受けられた。或いは柄谷行人の「他者性」論に依拠して、自由大学運動の限界を論じているが、その柄谷からの引用の仕方が不正確だとの指摘もあった。しかし著者はそうした自らの論文の弱点に気づきつつ、杏村の思想に内在化し、同時にその思想を相対化するという困難な課題に挑んでいるのである。自由大学の受講生の視点や現代的な「他者（理解）」論の視点の導入なども、その弱点克服の努力にほかならない。この意味においても、上述した問題点はあるが、いずれも本論文が達成した学術的価値を大きく損なうほどのものとは言えないと判断された。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成15年3月6日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。